

お残しは許しまへんで

教育相談専門員 沼波かおり

好き嫌いの多かった私は小学校時代「給食」と「夕食」時間が怖かった。「お残し」をするたび、いつも「食べ物があることの幸せ」について長い説教をくらった。例えば母に、学校の担任に。当時は、どこかにまだ「敗戦」の気配が残り、食物アレルギーなんて言葉も事象も認められていなかったから、「お残し」は人として許される事ではなかった。給食の時間、食パン以外のおかず、その他をとにかく食べ終えるまで、席を離れることは許されなかった。昼休み、運動場で楽しそうに遊ぶ級友を横目に見て、ほとんど泣きそうになりながら、さめた給食を食べる日々が続いた。



さすがに中学校に入学するころには悪知恵もついて、嫌いなものは担任の目を盗んで友人と交換するワザも身につけ、それもダメなときは、噛まずにお茶で飲み込むワザも習得した。ただ、家での夕食は、厳しい母の目をごまかすことはできず、相変わらず「他の兄姉が食べられるのにどうしてわがままを言うのか」とよく叱られた。いつしか、夕食を食べずに一日が終われたら・・・と願うようになっていった。

大学で実家を離れて自炊するようになり、願いはすぐ叶った。当然のごとく、嫌いなものは全く食べず、「恐怖の夕食」も摂らずに眠ることができる幸せを手に入れた。今時の女の子たちのように「ダイエット」の意識は無かったが、結果としてスリムな体型も手に入った。しかしこんな暮らしは長くは続くはずもなかった。やがて頻繁に微熱や倦怠感、貧血に襲われるようになり、ビタミンやタンパク質欠乏による「脚気(かっけ)」のような症状に陥った。

20代前半までの貧しい食生活は、その後結婚し、子どもを身ごもったことをきっかけに改善されていった。嫌いだった食べ物も、子どものためにだったら、お茶で飲み込まないでも不思議と食べることができた。こうして次第に食事を人並みに摂ることができるようになり、あたりまえの日常をやっと手に入れた。おかげでひねくれて偏った性格も少しはマシになった。今考えると、「食べること」は「生きようとする気もち」に直結していた。

この学校に赴任して、何十年かぶりに「給食」に再会した。給食棟で働く皆さんが作ってくださる、温かくておいしい食事のおかげで、夜のつらい勤務も乗り切れた。子どもころのような恐怖はうそのように消え、感謝感謝の給食だった。そして、給食棟で楽しそうにもりもり食事する生徒の皆さんの姿は、私をととても幸せな気分にくれた。

☆ カウンセラーの先生方が来校されます ☆

本校には次のカウンセラーの先生方が毎月来校されます。「辛いけれど、どうしていいかわからない」という人、「よく眠れない」「食欲がない」「体調が良くない」などの症状がある人は、ぜひ先生方に相談してみてください。秘密は守られますので安心してください。

《カウンセラーの先生と7月の相談日》

- 沼波 かおり先生 (本校教育相談専門員)
毎週火曜日、木曜日 午後1時～6時40分 (7/21以降はお休み)
- 堀 智哉先生 (各務原病院 臨床心理士)
毎週月曜日、金曜日 午後7時～9時 (7/18以降はお休み)
- 鷲見 栄子先生 (社会福祉士)
7月1日(金)、8日(金)、15日(金)、午後2時～4時

☆ 生徒のみなさんへ…面談は予約制です。HR担任、教育相談係(教育相談室:本館3階)、養護教諭(保健室:本館1階)の先生のいずれかに申し込んでください。

★ 保護者の方へ…カウンセラーの先生との面談は、保護者の方のみでも受け付けます。お申し込みは、定時制教育相談係(長瀬・岩佐・服部)までお願いします。

電話番号は(058)275-7185です。どうぞお気軽に申し込んでください。